

◇ 国 語

国 6－1～国 6－17 まで 17 ページあります。

第一問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

謝罪する、ということ子どもに教えるのは難しい。何か悪さをした子どもを叱りながら、「そういうときは」「ごめんなさい」と言うんだよ」と教えることを繰り返す。すると、子どもはやがて、「ごめんなさい」と言うことはできるようになる。

ア 今度は、場を取り繕おうと「ごめんなさい、ごめんなさい……」と言い続けたり、「もう「ごめんなさい」と言っ
たよ！」と逆ギレをし始めたりする。

「違う違う！ただ「ごめんなさい」と言えはいってもしゃないんだよ」——そう言った後の説明が本当に難しい。謝罪
というのは必ずしも、たんに「ごめんなさい」と言ったり頭を下げただけでは終わらない。「すみません」ではすまない
のだ。では、どうすれば謝ったことになるのだろうか。声や態度に出すだけではなく、ちゃんと申し訳ないと思うことだろう
か。しかし、「申し訳ないと思う」とはどういうことなのだろうか。そして、思うだけで果たしてよいのだろうか。結局のとし
て、「謝る」とは何をすることなのだろうか。

たとえば、電車で立っていてふらつき、隣の人の足を思わずちよつと踏んでしまった、といったケースでは、すぐに「すみ
ません」とか「ごめんなさい」と言えばすむ場合が大半だろう。踏まれた相手もなぜそう言われたのかを了解しているし、普
通は、その一言をもらえれば十分だと思はずだ。（むしろ、土下座までされたら気味悪く思うだろう。）

問題なのは、それではすまないことをやってしまったケースだ。たとえば、有名人が大きなフシヨウジを起こして、謝罪会
見を行ったり謝罪コメントを発表したりするとしよう。その際に皆の^{(二)ひんしやく}輦轡を買いがちな物言いの典型は、「私の発言が誤解を
招いたのであれば申し訳ない」といったものだ。というのも、これでは、「皆さんが意味を誤解しただけであって、私は非難さ
れるべきことを言っただけはなし」と弁解していることになるからだ。

また、「ご心配をおかけして申し訳ございません」とか「ご不快な思いをさせて申し訳ございません」という言葉もよく用い

られるが、これもまるで、謝るべきは心配をかけたことや不快な思いをさせたことであって、自分のした罪や過ちではない、と言っているように聞こえる。たとえば、交通事故の後に当て逃げをした人物が、謝罪会見の場で「皆さまに不快な思いをさせて……」と言ったとすれば、その人物は自分が法や道徳にもとることをしたことや、被害者を傷つけたことなどを謝っているのではないという風に、多くの人が受けとめるだろう。

謝罪の言葉として悪名高い常套句はほかにも色々ある。たとえば、非難されるべきことをなげしたのかと問われた際の、「自分の弱さで……」とか「私の未熟さによって……」といった言葉、あるいは、「私の不徳の致すところ……」という類いの言葉だ。こうした常套句はどれも、自分がなぜそれをしたのかについての具体的な説明を拒否するものであり、かつ、自分のしたことが主体的で意図的なものであったことを否定するニュアンスを帯びている。

「イ」、自分がそのとき気持ちを強くもてたり、成熟していたり、徳をちゃんと備えてさえいれば、そんなことを敢えて自分からしようなどとは思わなかったはずだ。自分の性状に流されて、どうしようもなくやってしまったんだ——そういう言い訳のニュアンスである。

以上のような「お約束」の言葉たちから逆に見えてくるのは、謝罪が謝罪であるために必要な本質的特徴だ。それは、「謝る」というのはまずもって、当該の出来事をいま自分がどういうものとして認識しているのかを表明することである、ということだ。（しかもその際には暗に、当該の認識が、謝罪する相手や世間の認識とおおよそ合致していることが期待されているとも言える。）

たとえば先述の、電車内でふらついて人の足をちよつと踏んでしまうケースにおいて、「すみません」と言うことは、私があるたの足を踏んでしまったのであり、悪いことをしたと認識している、ということ、タンテキに相手に伝える言葉になっている。

逆に、たとえば性的マイノリティに対する酷い差別発言をした人物が、謝罪の場で「誤解を招いたのであれば……」と言うとすれば、差別発言だと捉えているのは皆さんの方であり、自分の発言が差別行為であったとは認識していない、と表明して

いることになる。同様に、「不快な思いをさせて……」とか、あるいは「私の未熟さゆえに……」などと言うとすれば、その人物は、自分の行為の問題はたんに誰彼に不快な思いをさせた点に過ぎないと認識していることや、自分が未熟なために行為の意味を十分に理解していなかったことをシ^イサしている、と見なされるだろう。

ウ、そうした釈明で皆の納得を得られるケースもありうる。たとえば、問題の発言をしたのがまだ幼い少年で、本当にその言葉の意味を分かっていなかったと皆が認めるケースなどだ。しかし、発言の主が十分に年を重ねた大人であったり、普段から性差別的な言動を繰り返していたりしたならば、たんにごまかしの言い訳を並べていると判断されるだろう。

いずれにせよ、謝罪がまさに当該の差別行為の謝罪であるためには、自分が確かにかくかくのことは行い、それにはしかじかの意味があり、これこれの点で問題のある悪い行為であった、という認識を明らかにすることが欠かせない。謝罪の弁を聞く者は、まずもって本人の認識の如何^{いかに}を問うているのである。

ただ、それだけでは謝罪として十分ではない。たとえば、口先だけなら何とでも言えるから、本当^{まこと}にそう思っているかどうか分からない、という疑念が周囲から湧くこともしばしばある。

エ、長く頭を下げ続けるとか、土下座するとか、涙を流すといった態度が、本当にそう思っていることの印として示される場合もある。ただ、当然それらの態度もフリでありうる以上、本当にそう思っていることを究極的に証し立てるものにはならない。

そしてこのことは、謝罪というものを構成する、もうひとつの主要な特徴に結びついている。それは、謝罪^{いひがな}は儀式ではないということだ。謝罪は多くの場合、自分が何をしたのかを説明し、それが悪いことだったと認める所作を行うだけで終わるのではなく、むしろそこから始まる。それだけで常に謝罪を謝罪として完成させるような、そうした魔法の言葉や態度などは存在しない。ケイビ^いなケースを除けば、謝罪の言葉を発したり頭を下げたりすることは、謝罪のスタートライン^{しんざい}、謝罪^{いひがな}という実践のはじまりに過ぎないのである。

実際、私たちは普通、謝罪の言葉や態度の後に当人が何をするかによって、当人が本当のところどう思っているかを判断する。簡単な例では、謝罪した直後に人目につかない場所でげらげら笑っていたりした場合には、あの謝罪は本心からではなかった、と見なされるだろう。

「本心」そのものはどこまでも不確かでありうるからこそ、人はしばしば、当該の出来事を自分はいかかのように認識した以上、これからしかじかのことをすると約束し、それを実行することによって、本心そのものの証明の代わりとする。たとえば、自己をシヨバツするという約束。相手の溜飲^{（さ）りゆういん}を下げる何らかの行為をするという約束。生じた損害を賠償する約束。手紙を出し続けることなどによって、出来事を忘れずに反芻^{（さ）すう}し続けるという誓い。人を殺めてしまった場合の、その人の墓前にずっと花を供え続けるという誓い。麻薬に手を出した場合の、もう二度と手を出さないという誓い、等々。

そして、そのような約束の内容の多くは、自分がしてしまったこと（＝謝罪すべき自分の行為）によって損なわれたものや失われたものを何らかのかたちで埋め合わせる——その意味で責任をとる——という意味合いをもつ。たとえば、損なわれた相手の気持ちを晴らすとか、物的損失に対して補償を行うといったことである。

もちろん、この場合の「埋め合わせる」——償^{（つぐ）な}う、贖^{（あが）な}う——というのは、文字通りの意味で「元通りにする」ということではない。とりわけ、人の思い出の品を壊したり、生き物の命を奪ったりした場合などには、その損失を埋め合わせることなど不可能だ。それでも、自分がしてしまったことを後悔し、責任を感じている人であれば、どうにかして「償い」に相当する行為を行おうとする。埋め合わせられないものを埋め合わせようとするかのように、場合によっては自分が死ぬまで「償う」ことを続けるのである。

（古田徹也『いつもの言葉を哲学する』による）

問一 傍線部A・B・C・D・Eと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

A フシヨウジ

- ①国会をシヨウシユウする
- ②他人のことにカンシヨウする
- ③長寿を表すキツシヨウの印

- ②国王のシヨウゾウ画を飾る
- ④決定にシヨウフクしかねる

1

B タンテキ

- ①業界のイタン児
- ③犯行にカタンした罪
- ⑤タンソクを漏らす

- ②タンセイ込めて育てた米
- ④タンリヨクのある人物

2

C シサ

- ①敵方にイツシ報いる
- ③全体の構造をズシする
- ⑤法律のシイ的運用を防ぐ

- ②経済の混乱はヒツシだ
- ④選手のユウシを目に焼き付ける

3

D ケイビ

- ①ビモク秀麗な青年
- ③申請書にフビがある
- ⑤シンビ眼を養う

- ②シュビよく事を運ぶ
- ④人の心のキビに触れる

4

E ショバツ

- ①ショシ貫徹して目的を果たす
- ③ショキあたりして食欲がない
- ⑤ショグウの改善を求める

- ②ショミンには手が出ない値段
- ④ユイショある寺社を訪ねる

5

問二 空欄 ア・イ・ウ・エ に入る最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

ア

- ① さながら
- ④ けれども

- ② このように
- ⑤ いずれにせよ

- ③ すなわち

6

イ

- ① しかし
- ④ したがって

- ② なぜなら
- ⑤ つまり

- ③ ところで

7

ウ

- ① 加えて
- ④ とりわけ

- ② いわば
- ⑤ しかも

- ③ もつとも

8

エ

- ① それゆえ
- ④ ましてや

- ② 逆に
- ⑤ もしくは

- ③ ところが

9

問三 傍線部(a)・(b)・(c)・(d)・(e)の本文中の意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

(a) もとる

① 背く

④ 立ち返る

② 劣る

⑤ 取り上げる

③ 則る

10

(b) 常套句

① 常識的な言い方

④ 馬鹿にした言い方

② 敬意を込めた言い方

⑤ 多用される言い方

③ 遠回しな言い方

11

(c) 如何

① 誤り

④ ありよう

② 根底

⑤ 意味

③ ずれ

12

(d) 溜飲を下げる

① 緊張して見守る

④ 不満な感情を晴らす

② 欲望をかなえる

⑤ 言いたいことを飲み込む

③ きわめて不快にする

13

(e) 反芻(する)

① 自制心を持ち続ける

④ 不当な権力に逆らう

② 何度も繰り返し考える

⑤ 他人の気持ちに反応する

③ 強く反省し罪を認識する

14

問四 傍線部（一）「響聲を買いがちな物言い」とあるが、謝罪の言葉が響聲を買ってしまう場合、それはなぜだと筆者は述べているか。最も適当なものを次の①～④の中から一つ選べ。

15

- ①表面上は一般的な謝罪の言葉を述べているが、頭を下げたり涙を流したりといった行動をとらなっていないため、本心から謝罪の気持ちがあるかどうか、周囲から疑念をもたれるから。
- ②謝罪するための典型的な言い方は、大きな事故や事件などについて公に謝罪会見を行うときに使うべきものであって、個人と個人のあいだで謝罪する場合には似つかわしくないから。
- ③自分が意図的に罪や過ちをおかした主体であることを認めず、人々が誤解したせいにしたり、人々に心配をかけたことだけに言及して、罪や過ちそのものについて謝罪していないから。
- ④謝罪するための典型的な言い方をそのまま使っており、自分の罪や過ちについてどのように謝るべきなのかということについて、自分自身でほとんど考えていない印象を与えるから。

問五 傍線部（二）「謝罪が謝罪であるために必要な本質的特徴」とは何か。筆者の説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

16

- ①口先だけでは何とでも言えるため、言葉だけではなく、頭を下げ続ける、土下座する、涙を流す、など謝罪の言葉を証し立てするための行動を一緒に示した方がよいこと。
- ②本心では自分の行為が罪や過ちにあたると思えなくても、謝罪相手や世間に納得してもらうことが重要なため、「誤解を与えた」など部分的にでも謝罪すべきであること。
- ③おかした罪や過ちの責任主体として自己を規定することによって、そのような行為の意味を理解できないような未熟な人間ではなく、成熟した人間であると証明すること。
- ④自分が罪や過ちを確かにおかしたと認め、その意味について説明したうえで、謝罪する相手や世間が言うとおりの問題のある悪い行為であったという認識を明らかにすること。

問六 傍線部（三）「謝罪という実践のはじまりに過ぎない」とあるが、「謝罪という実践」が謝罪の言葉や態度だけで終わらな

いのはなぜか。筆者の説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

17

- ①それだけで常に謝罪を謝罪として完成させるような魔法の言葉や態度は存在しないため、場合によって適切な謝罪の言葉や態度を選択できるよう練習し続けなければならないから。
- ②謝罪が本心からのものである証明として、自分の罪や過ちによって損なわれたり失われたりしたものを埋め合わせようとする約束をし、それを実行することが求められるから。
- ③謝罪直後に陰でげらげら笑っていたりすると謝罪が本心によるものとみなされないことから、謝罪の言葉や態度を示した後も引き続き真剣な表情や慎んだ行動が必要であるから。
- ④人の思い出の品を壊したり、生き物の命を奪ったりした場合には、その損失を埋め合わせることが不可能であるため、謝罪の言葉や態度などを示したところで意味がないから。

第二問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

ギリシャ語で「川と川の間」を意味するメソポタミアは、チグリス川とユーフラテス川の間にあるヒョク[↑]な平野であり、農耕牧畜が最も進んだ地域でした。そこで暮らすカルデア人は、後世の人たちが「カルデアの知恵」と呼ぶほどに、精緻で豊かな星に関する知識を持っていました。彼らはその知識を使って、正確な暦を作り上げたのです。

カルデア人が着目したのは、天における太陽の位置でした。太陽が季節によって少しずつ天における位置を変えていることを知っていたからです。その変化を正確に知るためには、天に目印をつける必要があります。ところが昼の空には、目印となるようなものは何もありません。そこで彼らは、夜の天球に目印を見つけることにします。夜の空に満天の星が輝いているからです。それらの星をグループに分け、「座標」にしたものが「星座」です。彼らは星座をもとに、季節の移り変わりとともに位置を変えていく太陽の動きを正確に読み取り、天にその軌道を描いてみせたのです。

ア、実際の天に線を引くことはできません。そこで彼らは、頭の中に天球を思い浮かべ、そこに太陽の動きがたどれる線を引きました。これが「黄道^{こうどう}」です。太陽が黄道を一周する周期をもつて一年とする。これが現代人も使用している「太陽暦」ですが、その暦をカルデア人は、太陽の動きを、星座を利用して読み解くことで作り上げたのです。

なお「カルデア」という呼び名は、メソポタミア南東部に広がる湖沼地域を指す歴史的コシヨウ^Ｂです。紀元前一〇世紀以後にこの地に移り住んだセム系遊牧民の諸部族が、後世そのように呼ばれるようになったようです。しかしここでは単に、シュメールとかバビロニアとか、この地域を一般的に指す用語くらいに考えています。

人間の人間たるゆえ^⑤んは「考える」力にあります。脳科学的に言えば考えるとは、脳の中に外部世界をトウエイ^Ｃし、それを内部モデル化したような内部世界を構築し、それを基準にして様々な判断や意味づけを行うことです。カルデア人はまさに「考える民」でした。彼らは、綿密な天体の観測をもとに、その考える力で太陽の動きをモデル化し、一年という時の周期（暦）の意味づけを行ったのです。カルデア人の暦が特別なものになりえたのは、それが、精緻で合理的な「考える力」に基づいて作られ

たものであったからだと言えます。

朝と夜を、一年における「月」と同じように一二に分け、一日を二四分割し、現代に通じる「一時間」という時間の単位を作ったのも、このカルデア人だと言われています。現代に通じる均一な科学的な時間の概念は、天のリズムをモデル化することで生み出されたのです。

一方で、カルデア人にとって「時」は、自然に変化をもたらす「不思議な力」そのものでもありました。「年」は季節の変化をもたらし、「月」は潮の満ち干の変化をもたらします。これらが太陽と月という「星の動き」に関係していることに、彼らは気づいていました。

天上世界が、地上世界に変化をもたらしている――。

星の動きを通してそう考えた彼らは、太陽や月以外の星の動きも、何らかの力で、世界に変化をもたらしていると考えました。ここでいう星とは惑星のことです。一般に星といえば、今の言葉では恒星のことですが、惑星は、恒星のように規律正しい集団行動に従いません。この集団行動に従わない惑星の動きは、神々のイトを表しているのではないか。カルデア人はそのように考えたのです。そして、「年」や「月」と同様、その「目に見えない」力を暦に取り入れたのが「曜日」です。

ここにもまた、カルデア人の「星の動きを読む能力」が深く関係してきます。彼らは太陽の動きを追うなかで、黄道の付近に他の星とは異なる不規則な動きをする星がいくつかあることに気づいていました。他の星たちは、北極星を中心に円運動を描いているにもかかわらず、その星たちだけは、そうした集団行動に従わず、まるでそれが自分の意思であるかのように不思議な動きを繰り返していたのです。「惑える星」。彼らはこれらの星をそう呼び、太陽や月とともに特別な星と位置づけました。「惑星」の発見です。

その当時彼らが見つけた惑星は、火星、水星、木星、金星、土星の五つだったと考えられています。円運動する多くの星たちの秩序だった動きが天の意思を反映しているものならば、その秩序に逆らって動く星たちこそ「乱れ」を引き起こす原因であると、彼らは考えました。五つの惑星にはそれぞれ神が住み、洪水や干ばつ、疫病や戦争など、人間社会の「変事」を支配してい

るというわけです。したがって、惑星の動きと人間社会の出来事の「イ」、これを読み解くことによって、次なる変化、すなわち未来を占うことができる考えたのでしよう。そこで誕生したのが、星によって未来を占う技術「占星術」です。

このように、変事を司る惑星の不思議な力を、生活の中に取り込もうとして作られたのが「曜日」なのです。自然界にない「曜日」という摩訶不思議なリズムが暦のなかに存在し、その呼び名に惑星の名前が冠せられているのは、そうした理由からです。

カルデア人はこれらの星が、地球から遠い順に、「土星、木星、火星、太陽（日）、金星、水星、月」と並んでいると考えていました。この七つの星に「一時、二時、三時、四時、五時、六時、七時」という時間を順番に割り振れば、一日が二四時間であることから、「⁴2時間—7時間×3〓余り3」という計算により、次の日の「1」は、前日の「1」に位置する星の三つ先の星、つまり、前日の「4」に位置する星が割り当てられることになります。「土星」の次は「太陽（日）」、「太陽（日）」の次は「月」、その次は「火星」といった具合です。「土、日、月、火、水、木、金」といった曜日の順は、こうして決められたのではないかと考えられています。

自然の変化が「天体の動き」と関係していることに気づき、その動きを正確に観察することで「暦」という時間に関するモデルを作りあげたのがカルデア人です。しかし「天体の動き」自体については、合理的な説明を行うことはありませんでした。「星は、なぜ、そのように動くのか」という疑問に対して、彼らが持ち出した答えは、それが「神の意志」だからというものだったのです。秩序ある星の動き、不規則な星の動き、それらはすべて神が決めていると彼らは考えていました。彼らにとって、天は手に届かない「神の世界」であり、そこでの出来事は「神の意志」以外の何物でもありませんでした。

神の意志を人は目に見ることができない。だから、「星は、なぜ、そのように動くのか」という理由を人々は知る事が出来ない。つまり、それは人々にとって〈見えない世界〉であり、〈見えない世界〉を語りうるのは神だけだ、というのがカルデア人のみならず、当時の人々の「ウ」考えただったのです。

ちなみにここでいう神は、のちの一神教でいうところの形而上学的な神ではありません。星座にあてはめられた神々の姿からもわかるとおり、人間社会を反映した「神話」的な神々です。こうした考えを「⁵一笑に付す」ことはできません。説明できないこと、人智

の及ばない力に対して神を持ち出すのは、昔も今も変わらないからです。科学の時代といわれる現代においても、星に祈り、星占いを信じる人は少なくありません。

いずれにしろ、天体の動きとかたちで人の前に姿を現す〈見える世界〉が、我々が生きる〈見える世界〉に変化を及ぼすということに気がついた古代の人々は、〈見えない世界〉がもたらす変化を正確に知る手がかりとして、暦、あるいは時間を編み出しました。暦（時間）を通して、人類は〈見えない世界〉を記述する一步を踏み出したというわけです。暦の管理は、支配者の持つ特権でした。それは神の代理人としての地位を保証するものだったのです。

そしてこのことにより、人々の暮らしは大きく変わりはじめます。「時」を共有し、「時」によって出来事を記録することで、共同体の生き方に関するノウハウがどんどんチクセキ^Fされていったからです。農耕牧畜という生き方が暦を欲し、観察と考える力で作りあげたその暦により、共同体をつくって生きる。そういう人類の新しい生き方は、シュメールの地で、都市文明として順調に発展の道を歩みはじめました。^(四)〈見えない世界〉と文明の間の密なる関係は、こうして始まったのです。

（松井孝典『文明は〈見えない世界〉がつくる』による）

問一 傍線部 A・B・C・D・E と同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

A ヒヨク

- ① 彼女にはヒルイない力がある
- ③ 洪水で大きなヒガイを受ける
- ⑤ 条約をヒジュンする

- ② 畑にヒリヨウをまく
- ④ これはゴクヒ情報だ

18

B コシヨウ

- ① サユウタイシヨウに描かれた絵
- ③ 彼とはアイシヨウが悪い
- ⑤ キシヨウテンケツが明確なストーリー

- ② 自信を失いシヨウキヨクテキになる
- ④ シヨウジガミを破いたのは猫だ

19

C トウエイ

- ① 氷水に浸かりトウシヨウになる
- ③ このイチゴはトウドが高い
- ⑤ 雑誌に作品をトウコウする

- ② ダトウな解決策を探りたい
- ④ 雨水が地下にシントウする

20

D イト

- ① 全てのトドウフケンを訪ねた
- ③ トシヨカンで待ちあわせをする
- ⑤ トイキが聞こえるほどの静けさ

- ② お年玉のヨウトは教えないよ
- ④ 努力がトロウかどうかは分からない

21

E チクセキ

- ① 彼女のコウセキをたたえる
- ③ この授業はザセキが指定されている
- ⑤ この三角形のメンセキを答えなさい

- ② 卒業式でセキベツの情があふれる
- ④ 江戸時代に作られたセキヒの文字を読む

22

問二 空欄

ア

イ

ウ

に入る最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

ア

- ① たしかに
- ④ とはいえ

- ② したがって
- ⑤ あるいは

③ 反対に

23

イ

- ① 対立関係
- ④ 競争関係

- ② 緊張関係
- ⑤ 対等関係

③ 相関関係

24

ウ

- ① 儀礼的な
- ④ 受動的な

- ② 標準的な
- ⑤ 予備的な

③ 一時的な

25

問三 傍線部 (a)・(b) の意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

(a) ゆえん

- ① 宿命
- ④ 反目

- ② 利点
- ⑤ 理由

③ 欠点

26

(b) 一笑に付す

- ① うちとけて笑うこと
- ④ いやいや笑うこと

- ② 喜び笑うこと
- ⑤ 笑いをこらえられないこと
- ③ 笑って取り合わないこと

27

問四 傍線部（二）「カルデア人」を説明したものとして、最も適当なものを次の①～④の中から一つ選べ。

- ①カルデア人は紀元前一二世紀にはメソポタミア南東部に住んでいた
- ②カルデア人はチグリス川とユーフラテス川の間地域に住んでいた
- ③カルデア人が住んでいたのは農耕牧畜が全く進んでいない地域だった
- ④カルデア人はセム系遊牧民の子孫で甲骨文字を発明した

28

問五 傍線部（二）「惑星」を説明したものとして、最も適当なものを次の①～④の中から一つ選べ。

- ①黄道近くに現れて不規則な動きをする星々
- ②現在は「恒星」と呼ばれるようになった星々
- ③毎年同じ時期に同じ場所に現れる星々
- ④北極星を中心に円運動を描いている星々

29

問六 傍線部（三）「天体の動き」自体については、合理的な説明を行うことはありませんでした」とあるが、それはなぜか。

その理由を説明したもので、もっとも適当なものを次の①～④の中から一つ選べ。

- ①「天体の動き」を定めている神々の言葉は、とうてい理解できるものではないと人々は考えたから。
- ②「天体の動き」を考えるのは神の仕事であって、人間が関わるべきではないと考えたから。
- ③「天体の動き」は神の意思により人間に伝えられるもので、人はその時まで待つべきと考えたから。
- ④「天体の動き」を決めるのは神であって、人間が知ることができるものではないと考えたから。

30

問七 傍線部（四）「〈見えない世界〉と文明の間の密なる関係」とあるが、ここで言う「〈見えない世界〉」を説明したもので最も適当なものを次の①～④の中から一つ選べ。

- ① 太陽や月、惑星などが輝いている天上世界
- ② 洪水や干ばつ等の変事が起きる地上世界
- ③ 星々がどのように動くか決める神々の世界
- ④ 人間の体の内側に構築された内部世界

31

問八 本文の内容と一致するものはどれか。次の①～④の中から最も適当なものを一つ選べ。

- ① 「黄道」とは、季節の変化に即して位置を変える月の動きを描いたものである。
- ② カルデア人は惑星の動きと、人間社会で起きる「変事」の間に関係があると考えていた。
- ③ カルデア人は「占星術」を編み出したことで、神の代理人としての地位を確立した。
- ④ 現在に通じる「一時間」という時間の単位は、惑星の動きをモデル化して生み出された。

32